

二〇二〇年 コスモス紙上全国大会・表彰作品&評（付・尻取り短歌）

全体選

（グループ選表彰対象も併記）

☆一位（72票＋選者6票）・B組一位（18票）

教科書も酒も西瓜もつつみ来し風呂敷にけふ位牌を
つつむ
三重 森田 則子

大切に使われてきた風呂敷、そんな風呂敷に包む位牌とは作者の親の位牌だろう。色、模様、大きさなどどんな風呂敷か知りたい。（永上比）

☆二位（66票＋選者9票）・G組一位（21票）

父のいたアパート、施設、病院をナビから消して迎
え火を焚く
愛知 高橋みどり*

「アパート、施設、病院」が具体的です。そこへ作者は何回も通ったのだ。「ナビから消して」がよく効いて、現代の挽歌にした。（宮里）

☆三位（46票＋選者4票）・C組三位（14票）

猿、鹿、猪、狐、狸も棲みつくこの里を若者だけが
出てゆくのです
三重 高山 幸子

野生動物の羅列により共存する里の様子も浮かんで来る。口語で眩くような詠みで過疎の問題を明るくリズムよく仕上げ、やがて寂しい。（大野）

☆四位（41票＋選者3票）・D組三位（11票）

泣きすぎて泣いた理由をわすれ泣く幼なのやうに降
る今日の雨
福岡 大西 晶子

四句までは序詞的用法。詠んでいるのは、雨が一向に止まないことだけなのだが、幼子の泣く描写によって、雨の手強さが印象づけられている。（鈴木）

☆四位（41票）・A組一位（18票）

空海も戸惑いおらむ「三密」の変わり果てたる造語
となりて
東京 北条 忠政*

密教における「三密」と、コロナ禍の「三密」とのレベルの隔世を嘆いている歌。「変わり果てたる」に、その思いがよく出ている。（原質）

☆六位（37票＋選者2票）・B組二位（15票）

琉球の青きグラスを手に包みその海思ふ戦を思ふ
新潟 関川 洋子

琉球グラスの美しい青から、その海へ、戦へと思いを深める。

「戦」は琉球王朝時代をも想像させるが、現代に絞る「戦争」とするのも一案。（松尾）

☆七位（34票）・G組二位（19票）

五年忌の妻のパソコン「また会おう」と打ちて書棚
の奥へともどす
千葉 豊島 秀範

パソコンには妻の言葉が生き生きと残っているのだろう。会話するように打ちこんで再会を約す。淡々としてかつ深い相聞歌。（木畑）

グループ選

(順位は選者票の数を含まないで決定)

☆A組一位 北条忠政作品(既出)

☆A組二位 (11票+選者1票)

ひと振りに運命分かつときのありたくトの構へに持つ塩のびん
愛知 山田 恵里

一見、大仰でユーモラスな比喩のなかに、案外、料理・音楽・そして人生に対する本音が見える。力強いリズムも魅力的。
(小島)

☆A組三位 (10票)

君にあり吾あにある笑ふといふ所作のをりをり言葉越えてもの言ふ
愛知 服部 貞行

人はみな笑う。笑いの行為で、言葉を超えたコミュニケーションを取ることも可能になる。そうした「笑い」の不思議の効能をとらえた一首。(高野)

☆A組三位 (10票+選者3票)

満月だね すぐに〈既読〉のついたさきりしずもる夜
埼玉 春日 夏実*

LINEで〈既読〉はついたらけれど、返信はない。その物足りない心持ちを、夏らしい情感とともに詠んだ。〈既読〉と蚊遣り火が新鮮。(小島)

☆A組三位 (10票)

職場での覆面生活長すぎて顔も言葉も色をうしなふ
宮城 薄葉 茂

日々のマスク着用を「覆面生活」と捉えたところが、おもしろい。職の現場からの、切実で人間的な発信と思う。(小島)

☆B組一位 森田則子作品(既出)

☆B組二位 関川洋子作品(既出)

☆B組三位 (13票)

梅花藻のそよぐ小流れありしこと道祖神めぐりの里
神奈川 清水 正子
を浄きよめず

「道祖神めぐりの里」はそれだけでも風情があるが、更に「梅花藻のそよぐ小流れ」に土地も水も心も浄められるようだ。美しい作品。(松尾)

☆C組一位 (18票+選者1票)

未使用の今日といふ時を思ひつつゆつくりと飲む明けの珈琲
新潟 加藤かづゑ

早朝、一日の時間の過ごし方を考えている作者。「未使用の今日」という言い方が斬新である。第二句の字余りは解消できるかもしれない。(田宮)

☆C組二位 (16票+選者4票)

里芋の広葉をめくる風の手の白く見えつつひと日梅雨晴れ
神奈川 石原 佳子

里芋の緑の葉と葉裏の白の色の対比が梅雨晴れの光の中で際やかである。葉裏の白さを風の手と捉えたところにも詩情が溢れている。(橋)

☆C組三位 高山幸子作品(既出)

☆D組一位 (17票+選者5票)

陸橋はとほくへ風の吹くところ子どもころのわたしと渡る
愛知 河合 育子

陸橋の上を渡る風は、草原や川面をゆく風より遠くまで行く。そんな感覚がすずやかである。風に吹かれて時間も自在に行き

来できるようにだ。(田中)

☆D組二位 (15票)

思い出は力になると書かれおり綴じ糸ゆるみし父の手帳に
神奈川 高木 裕子*

内容のよい一首。「綴じ糸ゆるみし」にリアリティーがあり、読み手が映像をくつきりと思いつくことができる。「おり」は「あり」でも。(田中)

☆D組三位 大西晶子作品(既出)

☆D組三位 (11票)

宅配の朝採り春菊包みたる茨城新聞しつとりやわし

東京 浅田みどり

春菊の緑色が目に浮かぶ。(茨城新聞)から、春菊がどこから届いたかわかる。結句に愛おしさが出ている。作者と縁のある土地なのだろう。(水上丞)

☆E組一位 (16票+選者2票)

コロナ禍の真夏津軽のかたすみねふた囃子を吹く
青森 伊藤 公子
独り笛

コロナ禍でなければ大勢でにぎやかに吹けたのに、独り吹く囃子の笛の音はさびしい。来年への思いをこめて吹く笛の音色が心に響く。(小山)

☆E組二位 (15票+選者1票)

梅雨明けずコロナ禍去らず息子来ずのどかに積もる
兵庫 藤岡 成子
退屈時間

「明けず」「去らず」「来ず」と「ず」の三段重ねが今年の状況を気分的に表しているようだ。下の句には、少しさびしさも感じる。(小山)

☆E組三位 (12票)

端っこにいつも聞き役である友がボブカット決め颯爽と来る
福島 佐々木勢津子

いつも端っこにいて聞き役の友。でも今日は違う。ボブカット(要するにおかっぱ)の髪型で颯爽と現れ主役を務めるのだ。(風間)

☆F組一位 (15票+選者1票)

うづくまりじつと構へし黒猫がゴム伸びるごと塀かけのぼる
長崎 安田 博行

動物の、とくに猫の瞬発力には驚く。それをゴムの伸びに喩えたものはありそうでない。「構へて」の方がいいか。(大松)

☆F組二位 (13票+選者1票)

山畑へ吾はGOTO 草引きてあんぐり齧る完熟トマト
長野 中田 雅子

風刺が効いているが、作者の豊かな日常が描かれているため嫌みが無く楽しい。新型コロナウイルスを撃退するのはこんな自然のおおらかさかも。(福土)

☆F組三位 (11票)

時の禍に七夕垂も客もなく総の駅しづか風の流るる

千葉 朝比奈美子

七夕垂は紙垂のことか? 静かな生活のさびしさはあるが、その良さにも気づく時期。「風」で収めるのはやや弱いか。(大松)

☆F組三位 (11票+選者2票)

勝負好きに愛国心をブレンドし拍手してゐた筈のこの夏
山口 鮎川 清

東京五輪2020を詠んだ一首。七月二十四日開幕予定であっ

たのにまさかのこの事態。落胆をユーモアにくるむセンスが良い。(藤野)

☆G組一位 高橋みどり作品(既出)

☆G組二位 豊島秀範作品(既出)

☆G組三位 (12票+選者1票)

灯台の窓をくぐりて山風はちからいつぱい海風となる
福岡 有川知津子

灯台の中を吹き抜けただけで、山風は海風に生まれ変わる。なんと詩的な把握だろうか!「ちからいつぱい」のひらがな書きの頼もしさ。(津金)

☆H組一位 (15票)

マスクかけ目で話すとき前よりも長くのぞきぬたがひの瞳
京都 奥山析梨子

マスクが必須となった今、新たな発見がいい。会話も控え目にしているので、「目で話す」のだろう。「目」と「瞳」が使い分けられている。(木畑)

☆H組二位 (14票+選者2票)

おしまひの一つの段をていねいに二つの足でピョンと降りる子
新潟 小川 和恵

幼い子どもの一生懸命な姿といかにも取りそうな動作が的確に描かれてほほえましい。そんな子どもの姿を見る母もまた微笑む。(田中)

☆H組三位 (12票+選者1票)

足場組む銅管手渡す若きこゑ梅雨の晴れ間の空に徹り
千葉 長尾 和守

雨があがり作業ができる喜びもあるのだろう。張りのある若き

職人の声が、現場に居合わせた作者の心を明るくする爽やかな歌。(福土)

高野賞 (高野公彦選の六名)

☆ひとつ咲く白いあさがほ窓の辺にマスクが咲いてるやうな夏
宮城 斉藤 梢

「マスクが咲いてるやうな」という表現が意表を突く。「白あさがほ」の色と質感がマスクと重なり、今年の異常な夏を描き出す。(松尾)

☆古い母の眉をととのへ紅させば童女のごとく笑まひし日あり
広島 木戸 博恵

過去のある目を懐かしむ歌。化粧をしてあげるのは母の体自由にならないからだろうか。しみじみとした作者の心情が伝わる歌である。(田中)

☆お中元送りて待り長距離の義姉とのおしやべり半年分の
北海道 新保弥代枝

離れ住む親族との電話の楽しさは格別。送ったお中元の礼の電話を待つ作者の心弾みが楽しい。「長距離の」は「離れ住む」ではどうだろう。(藤野)

☆ふるさとをひとり守りてみし兄の逝きて消えゆくわたしのみなか
福岡 増田 順子

いま日本でみられる問題が自分に自分のことになった。生家が廃屋となっていくことを想像するせつなさが下句にこもって胸をうつ。(桑原)

☆高橋みどり作品(既出)

☆河合育子作品(既出)

選者たちによる

尻取り短歌

尻取り短歌とは、或る人の作品の結句から自分の好む言葉（但し名詞・動詞・形容詞に限る）を選び、その言葉を初句に入れて自由に歌を詠む、という遊びです。どのような尻取りゲームになっているか、お読みになってお楽しみ下さい。なお、選者が一人足りないので、小島なお氏に飛び入りで参加してもらいました。

（高野）

【甲グループ】

鳥群るる木が「集」の字となりしころ木に群れるしは

何鳥ならむ

桑原 正紀

鳥群るる木が「集」の字となりしころ木に群れるしは

何鳥ならむ

桑原 正紀

何をしに生まれてきしやふるさとの蒲原平野ただ雪野

原

橘 芳園

鳥刺しに來世はなりてはつなつを顎うつくしく森めぐりたし

田中 愛子

野放図に「時計止めろ」と野次飛ばすヤジ將軍の本多

議員は

水上 芙季

めぐり來し疫病の時代ナツツバキ散りても辞めぬ男を憎む

松尾 祥子

本さには積む一隅に差しおよぶ八月朔の朝のひかり

藤野 早苗

憎しみも肯ひ生きむ蟬声の絶えて一樹の影濃き真昼

影山 一男

後朝の別れ語りし遠き日の早朝補習新米のわれ

鈴木 竹志

影絵めく黒揚羽来てれろれろと朱の射干の花の蜜吸ふ

田宮 朋子

新しき木槿の花におはやうとあいさつをしてけふ

も雨安吾

木畑 紀子

甘き蜜なれば水割りのあてとなりふけゆく春の夜を味はふ

風間 博夫

雨の日は白い扉が濃く見えるアンリ・マティスの絵の裏の白
大松 達知

裏がはが表なるらし手をちぢめ脚をちぢめて死んでゐる蟬
原賀 瓊子

死の予感ありしや輪禍に倒れたるアラビアのロレンス
津金 規雄

その灼熱の生
生姜入れへてて噛む鰯へ炊きあげて生酒酌まむ熱り残る夜
小山富紀子

夜の秋さればしづかに雨はふり残年の生き潔くせむ
狩野 一男

潔きもの群鳥のなかの一つ鳥ひとつひとつを隠す群鳥
小島ゆかり

三味線がはげしく鳴りて緋鹿子のお七登りぬ火の見櫓を
水上比呂美

火器兵器持ちて使はず来た日本守りぬくべし領土「尖閣」
宮里 信輝

尖つた若者減りてまアまアといなされてゐる初老のわれら
大野 英子

初老とは初々しい古い還暦をスタートとして一発逆転いける
富士 りか

転生し立ち枯れている向日葵のシユレインガーは八月生まれ
小島 なお

八月は生者と死者の出会ふ月 木に群れて鳴く生者死者のこゑ
高野 公彦

〈終わりに〉

二〇二〇年の全国大会をどうするかということをめぐる、二月頃から編集会で話し合った。いったん秋に延期したもののコロナ禍の状況は好転しなかった。それでも何か実現したいという高野編集人の強い思いもあって、紙上での大会が決定した。その結果約三百名の参加を得て、従来通りの互選に加え、各作品に全て選者の評を付することにした。選者にはまた、大会らしい遊びの

要素を加えた「尻取り短歌」をしてもらった。この企画は高野氏の発案で、氏が選者全員とファックスをやりとりする方式で進めた。当初どれほど日数がかかるか読めなかったが、約二週間で全作品が揃ったのは驚異的だった。この紙上大会が成功裡に終わったのは、選者をはじめ多くの方のご協力があつたからだ。改めて御礼申し上げます。
(桑原)